様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５４９

研究課題名（和文）岐阜県方言データベース構築ならびに総合記述に関する研究

研究課題名（英文）On the construction of database and the description of dialects of Gifu prefecture

研究代表者
山田　敏弘（YAMADA, Toshihiro）

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：９０２９８３１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円、（間接経費）　540,000円

研究成果の概要（和文）：岐阜県内でこれまでに公刊された郡市町村史から方言に関する記述をすべてテキストデータ化し、その記述に含まれる特徴的な語彙（オノマトペ・挨拶表現等を含む）および文法的表現について、語釈、記述、県内類語、県外の分布等を合わせ、総異なり項目数5909、のべ項目数31,777を1000ページあまりの辞書にまとめた。成果は、紙媒体およびCD-ROMで公刊され、研究者ならびに県内外の図書館において広く公開された。

研究成果の概要（英文）：Five volumes of the dialectal dictionaries including word histories, item descriptions, etc. were published through the collection of the descriptions on dialects of Gifu prefecture. Also the database in CD-ROM were offered to the public use.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言　岐阜県

１．研究開始当初の背景

⑴　岐阜県内の方言記述は、他県に比べ格段に遅れていた。

このことは、1960 年代に岐阜大学に奉職し『岐阜県方言の研究』も編まれた奥村三雄氏が退職された後、県内の大学に岐阜県方言を専門とする研究者がいなかったことに主としてよるものである。

一方、奥村氏の教え子を中心とする在野の研究者による『日本の真ん真ん中　岐阜県方言地図』（岐阜県方言研究会編）など、一定の成果は、岐阜県内でも編まれてきた。しかし、おおまかな分布が示された上に、さらに、岐阜県内の方言に関して研究の基礎となる、包括的、かつ具体的な記述が待ち望まれていた。

これを受け、本研究申請者は、2001 年の着任以来、自らの研究費でおこなえる範囲において研究を続け、『ぎふ・ことばの研究ノート』を毎年度１冊刊行するなど、岐阜県方言のさまざまな研究をおこなってきた。

また、『岐阜大学教育学部研究報告』等においても、毎年、文法を中心に一定のテーマについて、論考を発表してきた。

ただ、包括的な研究となると、広い県土を駆け巡り調査をしなければならず費用もかかるため、なかなか着手することができないでいた。

⑵　申請者は、外部の研究者との協力について、すでに、10 年以上、岐阜県を主として担当することで、研究に携わってきた。

まず、全国の文法項目に関する方言研究について、「日本語諸方言の条件表現に関する対照研究（研究代表者：前田直子 2004-2006）、ならびに「『全国方言文法辞典』のための諸方言の文法に関する対照研究」（研究代表者：前田直子　2007-2009）等に参加し、専門分野とする文法の観点から関わり、知見を提供してきた。

一方、語彙や音韻を含む総合的な全国規模の分布調査については、国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」(2010～継続中)で岐阜県内の要地を調査するなど、地元大学の地の利を活かして関わってきた。

それらの研究において、全国方言との比較を通じて、岐阜県方言を、特に語彙の面からより詳細な記述をおこなう必要も出てきていた。

⑶　⑴⑵の理由から、国立大学である岐阜大学の研究者として、基礎的な記述を包括的に整理した上で、多くの人が手に取れる形で整備することが必要であると考え、語彙を中心とする記述を全県規模でおこなえる研究をなすべく科研費の申請をおこなった。

２．研究の目的

本研究は、岐阜県の方言について、次の成果を挙げることである。

⑴　すでにある方言集や郡市町村史等の資料、ならびに方言談話資料を、網羅的に収集する。その上で、画像ならびにテキストデータの形式でデータベース化すること。

⑵　⑴を用い、また全国各地の方言に関する記述も参照しながら、岐阜県方言語彙の語誌に関する研究を含む、岐阜県方言の総体的な記述研究を、語彙中心におこなうこと。

⑶　⑴および⑵に関して、研究者のみならず、岐阜県内外の方言に関心がある人が利用しやすい形で公表すること。

方言研究は、対象となる地域があってこそ成立する研究である。当然、その成果は、その研究の基礎となる地域に還元されてはじめて意味を持つ。広く岐阜県民にも利用しやすい形で還元することが、本研究の大きな目的のひとつである。

一方で、全国の研究者にも研究成果が共有されることで、岐阜県方言の特徴を知らしめることも、本研究の目的の大きな柱となっている。

国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」や、別に連携研究者として参加している科研費による研究『全国方言文法辞典』プロジェクトにおいて、用例提供・分析・記述を通じてよりよく知見を提供することは、本研究の目的として大きな割合を占める。

３．研究の方法

本研究は、大きく、⑴岐阜県方言データベースの構築、⑵⑴の情報を基礎とした全国調査・研究との連携・協力、⑶個人での岐阜県方言に関する総体的記述研究の３つに分けられる。

⑴　岐阜県方言データベースの構築

平成の大合併まで 99 あった市町村では、個別に市町村史が編まれ、その 75%に方言の記述が含まれている。また、さらに古く昭和の町村以前の単位においても、特に、教育熱心であった中濃地域など、いくつかの記述が残っている。

これらの資料の中には、その地域の図書館にしか保存されていない資料もあり、県内でも共有される環境が整っていない。また、当然、そこに記されている方言記述も広く知られる存在となっていない。

それらの方言記述をまず整理するだけでも有用と考え、すべての資料を収集する。

しかし、その記述が一箇所に集められただ

けでは、情報社会である現代には、十分な価値をもたない。記述された知見を、より広く共有される形式に整えていかなければならない。

本研究では、この点を鑑み、収集された資料を、活字のものはOCR(文字認識)ソフトを用いて、また手書きのものは手入力にて、テキストデータに起こし整理していく。

さらに、収集しただけではなく、全国の知見とも比較しながら、全国分布、県内分布の記述、語誌等を考察し記述していくことも求められる。

これらは、紙媒体ならびに電子媒体のものを公刊される。

⑵　全国調査・研究との連携・協力

共同研究者として関わっている国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」ならびに、現在、連携研究者として参加する日高水穂氏による『全国方言文法辞典』などの科研プロジェクトに、⑴のデータからより正確な知見提供を通じて協力をおこなう。

国立国語研究所のプロジェクトについては、語彙に関する分布調査も多く含まれており、各地の方言記述から、調査時に参照できる知見の蓄積が必要である。この点については、おおよその地理的分布などを、本研究成果によって準備できる。

また、方言記述の中には、語彙として文法形式が織り込まれていることも少なくない。「おこまい（やめましょう）」という記述から、未然形(意向形)につく「まい」を取り出し整理したり、「見らん」のような一段動詞のラ行五段活用現象に関する記述を見つけ動詞活用体系を構築したりするなど、語彙記述を通じて方言文法研究にも資するデータが提供される。

この点について、文法研究者の知見をもって分析することで、文法記述の掘り起こしも可能となる。

⑶　岐阜県方言の総体的記述研究

⑴⑵から得られた知見をもとに、語彙を中心としながらも、各地の記述を横断的に見ることによって音訛の方向性も理解される。このように、音韻、語彙、文法に関し、論文としてまとめられる研究をおこなっていく。

４．研究成果

本研究では、３の⑴に関し、５巻 1000 ページ超におよぶ方言辞典を刊行した。ここには、総異なり項目数 5,909、のべ 31,777 項目にもおよぶ記述が含められた。

また、方言辞典には、語誌も詳細な記述として含められ、さらには、検索も可能となるよう、CD-ROM によるデータベースも整備され添付された。

また、３の⑵に関しては、調査時に誘導項目として多様な語彙を提示できるなど、より質の高い調査へと寄与した。その成果は、現在、国立国語研究所プロジェクトリーダー大西拓一郎氏を中心に、全国規模でまとめられている。一方、『全国方言文法辞典』プロジェクトについては、複文表現の一部と活用体系の記述が終了した段階となっている。

最後に、⑶については、下記の通り、記述そのものに関するもの、特異な表現に関するもの、文法的表現に関するものについて、３本の論文を発表した。

残念ながら学会発表には至らなかったが、郡上市や白川町など、岐阜県内各地の研究会や講演会で、研究者ならびに住民に還元された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 山田 敏弘、岐阜方言のオノマトペ表現、岐阜大学教育学部研究報告　人文科学、査読無し、第 62 巻第１号、2013、pp.1-14

② 山田 敏弘、岐阜県方言として記述される共通語、岐阜大学教育学部研究報告　人文科学、査読無し、第 61 巻第１号、2012、pp.1-10

③ 山田 敏弘、岐阜県方言における動詞の活用について、岐阜大学教育学部研究報告人文科学、査読無し、第 60 巻第２号、2012、pp.1-11

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計５件）

①山田 敏弘、コームラ、岐阜県方言辞典Ⅴ＜文法＞、2014、178pp.

②山田 敏弘、コームラ、岐阜県方言辞典Ⅳ＜オノマトペ、幼児語、あいさつ・定式表現、比喩表現＞、2013、230pp.

③山田 敏弘、コームラ、岐阜県方言辞典Ⅲ＜ナ～ン＞、2012、232pp.

④山田 敏弘、コームラ、岐阜県方言辞典Ⅱ＜サ～ト＞、2012、244pp.

⑤山田 敏弘、コームラ、岐阜県方言辞典Ⅰ＜ア～コ＞、2012、180pp.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等は作成しなかった。

６．研究組織
(1)研究代表者
山田　敏弘（YAMADA, Toshihiro）
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号：90298315

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし